

「愛」「愛す」に就て

大野 透

「愛」「愛す」に就ては種々の問題がある。例へば、金田一春彦「日本語」一五五頁は、英語で love といえ、どんな人に対する愛情でも表わすことができるが、日本語の「愛」は、自分に親しいもの、自分と同等または以下のものに限って用いられる。この間新しくできた国語辞書を見たら、「敬愛」という語を「うやまい愛すること」とあったが、古くからの慣用例に従えばこんな日本語はない。「うやまう」ことは「愛する」と同時にできないはずである。これは「うやまいしたうこと」とすべきところだ。と述べてをり、この意見の様に「子供を愛するとは言つても、親を愛するとは言へない。親はうやまふものだ。」と言ふ人も確かにゐるが、一方、志賀直哉「暗夜行路」前篇には「私は心から母を慕ひ愛してゐた。」の例があり、又、この問題とされた辞書（広辞苑）の編者は「うやまい愛する」の表現を不当とは思はなかつたはずである。是はどう解すべきであらうか。又、「愛欲」と「敬天愛人」の愛には共通点がない様に見えるが、果してさうであらうか。この外にも多くの問題があるが、和臭のない漢語の愛に就て先づ述べる必要がある。以下、「漢語」は正統的な其に限る事にす。宮地敦子「漢文・歐文との交渉——『愛す』の系譜」（「身心語彙の史的研究」所載）を宮地Aとして引用するが、此は必ず参照すべきものである。尚、資料からの引用の表記は論拠に支障ない限り必ずしも原拠に忠実ではない。

1. 漢語の愛

漢語の愛の本義・転義は次の如くである。^{注1}

- A 好きな対象、気に入った対象に強く引かれ、固く執着して、一体でありたい、自分のものにしたい、近づきたい、離れたくない、失ひたくない、などと思ふ事。又、その思ひ。
- B かかる思ひをその対象に対する行動に表す事。
- C 好きな相手、気に入った相手からもよく思はれたいと強く願つて、其に応ずる行動をしようと思ふ事。相手の為になる事をしようと思ふ事。相手を大事にしようと思ふ事（好悪とは必ずしも関係ない）。又、かかる思ひ。
- D かかる思ひをその相手に対する行動に表す事。

但し、専ら愛B乃至愛Dを表す用法は無い。愛Aは愛の本義に当り、愛Bは愛Aの願望・意欲が行動に表れたものであつて、愛は本来は自己本位なものであるが、好きな相手、気に入った相手からはよく思はれたいのが自然であり、又、相手との一体感から相手の為になる事をしようと思ふのも自然であつて、かかる思ひとその表現に対応するのが愛Cと愛

(14) 「愛」「愛す」に就て

Dである。C・Dの段階では、相手の事を思ふ事によつて、自己本位から相手本位に移る事も可能であつて、遂には、好悪とは無関係に、純粋に相手を思ひやる域にも達し得るのである。愛欲の愛は愛A・Bに属し、敬天愛人の愛は好悪を超えた愛C・Dに属してゐる。愛Aのみを表す例は案外少いが、幽明録逸文（太平広記二七四）の、

有人家甚富，止有一男，寵恣過常，遊市，見一女子美麗，売胡粉，愛之，無由自達，乃託買粉，日往市得粉便去，初無所言，……答曰，意相愛染，不敢自達，然恒欲相見，故仮此以觀姿耳，……

の愛之の愛はその例で、いはゆる一目惚の瞬間を表してゐる（相愛染の愛はA～Dに当る）。愛は、その起原からも主我性を完全には超越し難いので、仏教は愛を不善・染汚（連声によりゼンマクゼンワ）とする傾向が極めて著しいが、善とする愛（例へば愛語の愛）もある——慈悲を尊ぶ——。儒教で尊ばれる愛は、主我を否定した愛C・Dである。

愛の主体は、人及び擬人化された存在、及び動物である。愛の客体は人に限らず、いかなる事物でもよいが、人及び擬人化された存在、及び動物が代表的である。愛の主体は客体よりも上位である傾向が著しく、その異例、殊に主体が客体よりも下位である例は、清代までは、直接・間接の儒教的影響によるものが多いが、仏教関係の例も少くない。愛は、親子・君臣の間では、親→子、君→臣の場合が普通であり（中文大辞典が例へば愛父を敬父也、愛主を敬愛君主也と積する例などを参照）、男女の間でも、男→女の傾向が極めて著しかつたのである（女→男の例は同等の觀念による場合が多い）。「情史」の巻六「情愛類」はやや特殊であつて、「男愛女」の例を一二例、「女愛男」の例を八例、「男女相愛」の例を四例挙げてをり、「女愛男」の部の「鍾夫人」には、「王渾妻鍾夫人，每嘗卿渾，渾曰詎可爾，妻曰憐卿愛卿，是以卿卿，我不卿卿，誰當卿卿」とあるが、世説新語，惑溺「王安豊婦常卿安豊，安豊曰，婦人卿婿，於礼為不敬，後勿復爾，婦曰，親卿愛卿，是以卿卿，我不卿卿，誰當卿卿，遂恒聽之」の異伝である（妻は夫を卿と呼ぶよりは君と呼ぶ方が礼に叶つた）。尚、愛されるLを表す慣用表現「愛L」に於て、Lは親・君の如き上位者である例はなく、子・臣の如き下位者に限られる——男女間では愛妻・愛妾などはあつて、愛夫の如きはない。近代の俗語の愛人の例はやや異例——事にも、愛の上位→下位の傾向が窺はれる。紅樓夢（一三）「想他素日憐貧惜賤愛老慈幼之恩」の愛も、気持の上では上位→下位（強者→弱者）である。

広韻は、愛に憐也、憐に愛也又哀矜也と註してゐるが、イトホシ(>イトシ)、カハユシ(>カハイイ)などの場合の如く、憐愍を表す語と愛を表す語とは相通ずる傾向がある（同根の語に於ては、両義が同源の場合と、憐愍の意から愛の意が生ずる場合とがあり、逆の場合はない様である）。^{註2}漱石「三四郎」で、与次郎が“Pity's akin to love”を「可哀相だた惚れたつて事よ（可哀相だとは惚れたと云ふ事よ）」と訳した場面も想起される——pityは piety と同じくラテン語 pietas（人として当然守るべき事、為すべき事の意から、親愛・憐愍などの意も生じる）に由来する——。春色梅児答美、初編卷之一では、米八が「ヲヤかわいゝもかわいらしいもかわいそふだも、同じことじやアありませんかへ」と言つてゐる。憐=愛は先掲の情史の文にも見え、趙嘏、寄淮南幕中劉員外詩「愛月憐山不下樓」に於る如き例もある（愛憐・憐愛なる語もある。可憐に就ては「詩詞曲語辭匯」が、

下位→上位の例はない。

恋愛なる語は、広田栄太郎「近代訳語考」三二頁が述べる如く、W. Lobscheid の英華字典に於る Love などの訳語に初めて見えるが、男女間の愛に限られるわけではない。現代中国語の恋愛が男女相愛、男女相悦とされて男女の愛に限つて用ゐられるのは日本語の恋愛の影響（模倣）に由るのであるが、夫婦の間にも用ゐられて、日本語の用法よりも広い。日本語で、「恋愛」が恋ひの意で明治前期に用ゐられ始めたのは、卑俗な「恋慕」に代る語が求められた結果である。現代中国語に於る日本語の影響は意外な程大きく、例へば、漢語としては「いつくしみいたはる」の意（中文大辞典は愛護慰勉也とし、愛弟を謂愛撫其弟也と釈す）のみを有した愛撫が、現代中国語では英語 caress などに当る、愛の肉体的表現の意をも得たのは日本語の影響である。愚迷発心集直談（岩波文庫本）の四・一四には「愛別離とは妻子兄弟共に相恋愛し集会娯楽す……」とあるが、この恋愛は、古来多用された愛恋の誤であらう。

次に愛別離苦に就て述べる。大漢和辞典は、愛別に「(一)わかれをしむ。愛別離苦を見よ。(二)親愛する人と別れること。」、愛別離苦に「八苦の一つ。父子・兄弟・夫婦等、相愛して居る人との離別をしむ苦しみ。愛人とわかれるなげき。わかれのつらさ。」と註するが、この愛をヲシムと解するのは誤である。「愛 M」の愛がヲシムの意の場合、M は財・才などの如く貴重視されるものに限られる事を知るべきである——愛死（不愛死の如き否定表現に見えるのが例）の死は貴重視されてゐる——。愛別離苦は愛別離一苦であつて、(愛別一離苦ではない)、愛別離——原語のサンスクリットでは priya-viyoga 乃至 priya-viprayoga (愛+別離)——は、「愛と別離」「愛して(愛しながら)別離する事」である。日葡辞書が愛別を <Amor, & apartamento que se tem por hũa das penas desta vida> と訳するのは妥当である(愛別離苦の訳は忠実ではない)。

2. 日本語の「愛」「愛す」

二・一 辞書の説明

愛・愛スに就ての若干の国語辞書に於る記載を、語釈を主として挙げれば、次の如くである。

愛に就ては、言海（明治二二～二四）に「^{アイ}ヅルコト。イツクシムコト。カハユサ。」、日本大辞書（明治二五）に「物ニ対シ、心又ハ想ヒガ殊ニヤサシク、又深く、ソレヘ傾ク有り様。=イツクシミ。=イトホシサ。」、日本大辞林（明治二七）に「かはゆきおもひ」、「ことばのいづみ」（明治三一）に「なさけをかくること。あはれに思ふこと。いつくしみ。情愛。慈悲。」、「^{ロ-マ文字}引く国語辞典」（大正四）に「(1)いつくしむこと。かはいがること。このむこと。したふこと。(2)めぐむこと。(3)をしむこと。(4)かくすこと。」、言泉(改修、大正一〇～昭和四)に「(一)なさけをかくること。いつくしみ。情愛。慈悲。慈愛。(二)『英 Love』男女のなさけ。夫婦のなさけ。こひ。らぶ。恋愛。(三)[基]『英 Love』神が人類に幸福を与ふること、又人が神を父とし、他の人類を兄弟と思ひて敬愛すること。信仰・望と共に基督教三徳の一。」、大言海(昭和七～一二)に「(一)イツクシムコト。^{アイ}ハルムコト。(二)愛^{アイ}デ親シムコト。カハユガルコト。(三)惜シムコト。」、大日本国語辞典(修訂、

(16) 「愛」「愛す」に就て

昭和一四)に「(一)かはゆがること。いつくしむこと。めづること。惜しむこと。あはれむこと。(二)〔英 Love の訳語〕或る人に対して、特別にめでいつくしむ心状(男女間の愛など)。恋愛。(三)宗教上の語。神が、我れ等人類を保護しいつくしむ性質。」、広辞苑(昭和三〇)に「(1)なさをかけること。かわいがること。(2)男女が思いあうこと。恋愛。ラブ。(3)何ものかにひきつけられる感じ。また。或物事に没頭する快感。(4)愛玩すること。(5)愛撫。(6)〔宗〕キリスト教で、神が人類に幸福を与えること。他の人類を兄弟と思つてかわいがること。(7)〔仏〕十二因縁の一。五官上の欲を貪愛(貪)すること。」、岩波国語辞典(昭和三八)に「そのものの価値を認め、強く引きつけられる気持。①かわいがり、いつくしむ心。『子にこそぐ』。いつくしみ恵むこと。『神の一』。いたわりの心。『人類一』◎大事なものとして慕う心『母への一』。特に、男女間の慕い寄る心。恋。◎その価値を認め、大事に思う心。『真理への一』」、岩波古語辞典(昭和四九)に「◀相手に好いて強く執着し、心にかかつて忘れ離れ得ない心持を表わす語>>(1)親兄弟などの情愛。(2)広く、人間・生物に対する思いやり。いつくしみ。(3)愛着。執着。愛執。(4)愛欲。色欲。(5)気に入つて大切にすること。愛玩。(6)人あしらいのよいこと。あいそ。」、日本国語大辞典(昭和四七～五一)に「(1)親子、兄弟などが互いにかわいがり、いつくしみあう心。いつくしみ。いとおしみ。(2)仏語。①十二因縁の一つ。……◎浄・不浄の二種の愛。……(3)子供などをかわいがること。愛撫(あいふ)すること。幼児をあやすこと。(4)(品物などに)ほれこんで大切に思うこと。秘蔵して愛玩(あいがん)すること。(5)顔だちや態度などがかわいらしくて人をひきつけること。あいきょう。(6)人との応対が柔らかいさま。あいそ。(7)キリスト教で、神が人類のすべてを無限にいつくしむこと。また、神の持っているような私情を離れた無限の慈悲。→アガペー。(8)男女が互いにいとしいと思ひ合うこと。異性を慕わしく思うこと。恋愛。ラブ。また一般に、相手の人格を認識し理解して、いつくしみ慕う感情をいう。」とある。

愛すに就ては、言海に「(一)愛ヅ。イツクシム。イトホシム。カハユク思フ。(二)大切ニナス。ダイジニ思フ。『君王』『国ヲ』(三)面白シト思フ。好ミ楽シム。『山水ヲ』、日本大辞書に「(一)イツクシム。=イトホシク思フ。=メツ=カハユガル。(二)フカクオモフ。—「君ヲあいす」。—「真理ヲあいす」。(三)タノシミオモフ。」、日本大辞林に「たいてつにす。かはゆくおもふ。」、「ことばのいづみ」に「(一)いとほしく思ふ。いつくしむ。かはゆがる。めづ。(二)大切に思ふ。」(『国語辞典』では愛の項に撰せられる)、改修言泉に「(一)いとほしく思ふ。いつくしむ。かはゆがる。めづ。このむ。(二)大切に思ふ。大事にす。太祇『てのひらに愛して見する葡萄かな』、大言海に「(一)イツクシム。愛ヅ。イトホシム。カハユガル。(二)大切ニナス。ダイジニ思フ。『国ヲ愛す』『家ヲ愛す』(三)好ミ楽シム。面白シト思フ。」、大日本国語辞典に「めづ。いつくしむ。かはゆく思ふ。(二)互ひに慕ひ思ふ(男女など)。(三)大切に思ふ。重んず。惜しむ。(四)面白しと思ふ。好む。」、広辞苑に「(1)かわいがり。(2)すく。このむ。面白いと思う。(3)慕い思う。(4)大切にす。」、岩波国語辞典に「それに対し愛をこそぐ。①かわいがり、いつくしむ。『子を一』。大切にす。『国を一』◎異性を恋慕う。◎物事を強く好む。『酒を一』(「愛する」の条)、岩波古語辞典に「(1)親が子を、夫が妻を、男が女をなどのように、相手

を大切にし、かわいがる。(2)広く人間をいつくしみ、いたわる。(3)気に入る、大切に
 する。愛好する。(4)愛着する。執着する。(5)愛欲にふける。(6)惜しむ。(7)適当に
 あしらう。(8)幼児などの機嫌を取る。あやす。』、日本国語大辞典に「おもに人や動物を
 かわいく思って心が引かれる場合。(1)強く心が引かれ、いちずにかわいがる。寵愛する。
 (2)愛情を行為に表わす。また。単に、なでさする。愛撫(あいぶ)する。愛玩(あいがん)
 する。(3)(男女の間で)慕わしく思う。恋しく思う。(二)物事にある価値を見いだして心
 が引かれる場合。(1)貴さ、美しさなどを感じて、心から大切に思う。(2)美しさ、おい
 しさ、良さなどを好んでそれを楽しむ。愛好する。賞美する。(三)(一説、相(あい)する)
 適当に扱う。子供などのきげんをとる。あやす。』(「愛する」の条)とある。

上記によっても、愛・愛スの語釈が、明治・大正・昭和と次第に進歩した事が窺はれよ
 う。明治では日本大辞書の愛の説明が異色である。改修言泉と大日本国語辞典が男女の
 「愛」を英語 love の訳語とする事に注目される。古くは、愛・愛スに愛A・愛Bの意があり、
 愛(愛A・愛C)の肉体的表現の意があつた事が、明確に認識されるに至つたのは、
 昭和期^{注3}である。言海等が「君を愛す」に於て下位→上位の「愛す」を認めてゐる事にも注
 意される。

二・二 近世までの用例

上代資料には義字の愛が散見するが、当時、字音語の愛は、確証はないものの、恐らく
 存在したであらうし、平安初期の点本の例から、字音語由来の「愛す」の上代に於る存在
 も否定し難い。例へば、万葉集に於て、愛河波浪已先滅(五・七九四右)の仏語の愛河は
 字音語と推せられ、(この愛は愛A・Bの面が著しい)、「又説、愛無過子、至極大聖尚有
 愛子之心、況乎世間蒼生誰不愛子乎」(五・八〇二右)の三例の愛は、訓読され得たと
 もに、第一の愛は字音語、第二・第三の愛は字音語の動詞化でもあり得たと考へられる。

平安期の現存和文資料では、中期までは「愛す」の例はないが、「愛」は、熟語の例と
 して、宇津保物語、俊蔭「ちちははがあいしとして、一生にひとり子なり」の愛子や、源
 氏物語、夢浮橋「もとの御契りあやまち給はで、あいしふの罪をはるかし聞え給て」の愛
 執に見える。諸資料に散見するアイキヤウ乃至アイギヤウは通説の如く愛敬に当るのであ
 らうか^{注4}、これにも愛の例を認め得る。「愛」「愛す」は平安後期以降、殊に院政期以後の
 和文には次第に使用が著しくなつて行く(昔、和語では表せない意を表す)。よく引用され
 る、栄花物語「親腹の五宮をば、いみじうあいしおぼし」、狭衣物語「みかどのきみのあ
 いしたまふべきあがほとけを」、大鏡「いますこし六条殿をばあいし申させ給へりけり」、
 堤中納言物語「この虫どもをあしたゆふべにあいし給ふ」の愛スは未だ孤立的な用例であ
 つて、上位→下位の例のみである。白河法皇御告文案(石清水文書之一)の「幼齡之主を
 愛念シ」の複合動詞に於る愛は、白河法皇が堀河天皇を愛念する事に係り、上位→下位の
 例に外れるものではない。

俊類髓には宮地A一五八頁も挙げる如く「愛す」の複数例が見える事に注意される。

(a)むかし男ありけり。女を思ひてふかくこめて愛しけるほどに、……

(b)昔もろこしに玄宗と申すみかどおほしけり。もとより色をなむこのみ給ひける。い
 みじう愛し給ひける女御后なむおほしける。后をば源憲皇后といひ、女御をば武藏

(18) 「愛」「愛す」に就て

妃となむきこえける。いみじう愛(し)おほしける程にとりつづき二人ながら失せ給ひにけり。

(c)楊元琬といへる人の娘ありけり。世の中のまつり事をもし給はず。春は花をともにもてあそび、秋は月をともに御覧じ、夏は泉を愛し、冬は雪をふたり見給ひき。

(a)(b)の例は男→女である。(a)では、「思ひ」が愛A・C(殊にA)に当るのに対して、「愛し」は専ら愛B・D(殊にB)に相当する。(c)の「愛し」は主に愛A・Bに当る。夏の泉が肉体的快感を与へる愛すべきものとされたのは自然であつて(今昔物語(一〇・七)の類話では「夏ハ泉ニ並テ冷ミ」とある)、雪月花の場合とは異質である。

今昔物語には「愛」「愛す」が相当現れる(宮地Aに一往述べられてゐる)が、一般に仏教思想に於る煩惱として捉へられてゐる。親→子、男→女の例が主体を成すが、「……此ノ女、東人ニ深く愛欲ノ心ヲ発ス。……女、愛ノ心ニ不堪ズシテ、東人ヲ恋ヒ悲ムテ、忍テ其ノ辺ヲ不離ズ」(一六・一四)では女→男(男女対等)の例が見える。「今夜正シク女ノ彼ノ許ニ行テ、二人臥シテ愛シツル顔ヨ」(三一・一〇)の例(男→女)は俊類髓腦の(a)の例の如く専ら愛B・D(殊にB)に当る例であるが、かくの如く専ら愛B乃至愛Dに当る例は、漢語の「愛」にはなく、例へば先掲の幽明録の愛楽の例も然りである。(専ら愛A乃至愛Cに当る例はある)。外に注意すべき例を挙げれば次の如くである。

(a)……吉馬ニ乗タル者ノ馬ヲ愛シツツ、道モ行キ不遺ズ、翔ハセテ、合タリ(一六・二八)

(b)……此ノ硯ヲ取出シテ見ルニ、実ニ伝ヘ聞ツルヨリモ云ハム方无ク微妙ナル、愛シテ、手裏ニ居テ差上ゲ差下シ、暫ク見ル程ニ……(一九・九)

(c)……故別当ノ肉村ナレバ吉キナメリ、此ノ汁飲レヨト妻ニ云テ愛シ食ケルニ(二〇・三四)

(a)の例(古本説話集・宇治拾遺物語に類例)は愛B・Dに当り、漢語の愛の用法とは異なる。(b)の例を単に愛玩すると解するのは不精確であつて、硯のすばらしさに一目惚した状態(愛A相当)を先づ表すとすべきである(先掲の幽明録の第一の愛を参照)。(c)の例は主に愛Bに当り、単にウマガルに当てる位では不十分である。

上述の様に、「愛す」は院政期頃に漢語「愛」にない用法として専ら愛B乃至愛Dを表す通俗の用法を生じたが、是は益々通俗化して、肉体的表現に限られる用法を生じ、更には、愛とは必ずしも関係なく、相手を喜ばせる為、気に入られる為の行動を表す傾向が著しくなつてゐる。例へば、沙石集「幼少ニシテ先考ノ御膝ノ上ニ居テ被愛テヲワセシ事」の「愛」は単なる肉体的表現でもよく、洒吞童子(御伽草子)「……よるにもなればそのうちにて、われらをあつめ、あひせさせ、足手をさすらせ、おきふし申が、……」の「愛せ(あひせ)」は、愛とは関係なく相手に快感を与える為の肉体的表現(動作)を表してゐるのである。「毘沙門の本地」(御伽草子)の「その所に幼き男子一人女子一人をひだりみぎりに置き、愛し居たる女人あるべし。……をしへの如く二人の愛人を愛したる女人あり。」の「愛し」も愛B・Dに当るが、女→男、女→女で、而も上位→下位である。(この「愛人」は性的関係を伴はない特異な例で、「愛」は愛A~Dに当る)。「ゑのこと馬の事」(天草本伊曾傳物語)の「ゑのこをその主人愛して、つねに膝のうへに置き、だきかかへて、ふびんを加へられた。又ある時その主人はかから婦られたれば、その膝にあがり、胸に手をかけ、口をねぶりなどして、いと馴々しいのであったによつて、主人いよいよ愛せら

れたところで、驢馬この由を見て、羨む心がおこつたか、『われもあのごとくにして愛せられよう』とおもひ、……」に於て、「愛し」は愛B・Dの面が強く、二例の「愛せ」は専ら愛B・D(肉体的表現)に相当する。「愛す(る)」のかかる通俗的用法が室町末期の民衆の口語にも浸透してゐた事が知られるが、この通俗的用法は、江戸時代では次第に「子供をあやす」意に限定されるに至り、而も江戸末期には一般に亡びるに至つてゐる(亡びたのは、江戸の方が上方よりも早い。「愛す」の表記は明治にも残る)。尚、おくのほそ道「鳴々の数を尽して、……負るあり抱るあり、児孫愛すがごとし」(「松島ノ賦」では「愛するがごとし」とある)の「愛す」も愛B・D(肉体的表現)に当るが、caressの動的なるに対して静止状態であつてもよい事に注意される。通俗的用法の「愛す」は上位→下位の方が普通であるが、酒呑童子の例の如きがあり、幼児→幼児、幼児→大人の如き例もあるのである。

次にキリシタンの辞書に於る「愛する」に就て述べる。日葡辞書は、(1) <Amimar & mostrar sinaes damor> (愛無し、愛の印を表す。即ち、愛を顕はに表現する)、(2) <Estimar & folgar com algũa cousa que he da gusta> (好ましいものを評価し、楽しむ)、の二義を挙げるが、(1)は通俗の意味で、民衆にも用ゐられたのに対して、(2)は民衆の用語とはやや遠いものである。天草本伊曾保物語には、先掲の例の外に、「樹木を愛する」(序)、「……の人々我をふかう愛せらるれば」の二例が見えるが、ともに純粹の民衆の用語ではなく、第一の例は(1)(2)の語意を兼ねるものの、第二の例は精神的な愛に傾いてゐて、(1)(2)では説明し切れないものがある。一六〇〇年前後の「愛する」が(1)(2)の意に限られなかつた事が、第二の例によつても知られるが、日葡辞書に於ても、「愛悪」に<愛シ、憎ミ。Amor & odio. S.>、「愛恩」に<愛シ メグム>、「愛憎」に<愛シ、憎ミ。Amor, & odio.>とあり、「仁」の条の説明文に<自ラヲ忘レ、他ヲ愛シテ>とある事からも、「愛する」が漢語「愛」に当る広い意味を持ち得た事、儒教風な意味をも持ち得た事が知られるのである(「愛」とamorの対応にも注意。amorは「大切」に対応するのみではない)。羅葡日辞書では、「愛する」は一四例見えるが、愛B・Dに由来する通俗の意味に限られ、而も、相手の好感・好意を得ようとする意図を明示する用例が殆どである。是は當時の同語の通常の使用状況を反映するものである。「愛する」の通俗的語義は、愛欲乃至愛情を相手に対する行動に表現する意から、愛欲・愛情とは必ずしも関係なく、相手の好感・好意を得ようとする意にもなつてゐたのは、既述の如くである。例へば、Popularitasの条に<民ノ機嫌ヲトル為ニ愛スルコトライウ>、Illecto及びIllicioの条に<追従ヲシ、ヘツライテ人ヲナビクル、或ハ、愛スル>、Lenioの条に<スカス、愛スル、或ハ、ナツクル、ナダムル>、Allicefacioの条に<愛シナビクル、アイ附クル、スカシ寄スル>、Alludoの条に<愛シテ遊ぶ、甘ヤカス>、とあるのが参考となるであらう——Dissavior<愛シテ顔ナドヲ吸ウ>、Favorabilis<人ニ愛セラルル、或ハ思ワルルモノ>の「愛スル」も好感・好意を期待する事と無縁ではない——。羅西日辞書はBの部で、<Blandior, iris, concubo, as. amancebarse y halagar ala mâceba. tecàqe vo ai xixi, uru.> (manceba, mâcebaはconcubine, halagarはcaressに当る。xixiはxiの誤)と記すが、この唯一の「愛する」も通俗的用法で、好感・好意を期待する事と深い関係が

(20) 「愛」「愛す」に就て

ある (blandior).

さて、「愛」は、複合語使用以外では、即ち単独態としては「愛する」ほど用ゐられる事はないが(キリシタンの辞書には見えない)、中世に於て、「愛する」の通俗的語義に於て、通俗的語義を持つに至つてゐる。即ち、「愛」は通俗的には、専ら愛B乃至愛Dに当る用法を生じ、殊に、相手の好感・好意を得ようとする行動を表す傾向が強くなつて、更には、他人の好感・好意を得る可能性の強い行動、態度、容貌などもを表すに至つてゐるのである——「愛らし」はこの通俗的な「愛」による形容詞であるが、日葡辞書に見える<心ノ愛ラシイ人>の例は特殊例と言つてよい——。通俗的な「愛」はアイキヤウ・アイサウに通じ得る意味を持つのであるが、アイサウには問題がある。日葡辞書は、アイサウラシイの語を掲出するが、その用語例ではアイサウラシイとアイソウラシイの二形が見え、羅葡日辞書ではアイソウラシキ(二例)、アイソウラシク(二例)、アイソウラシサ(一例)の例が見えるのみであるからである。アイソウを原形とする説もあるが、恐らくアイサウが原形であつて、多用された為に発音易化が起つてアイソウとなり、更にはアイソ(日葡辞書では名詞形としてアイソのみを挙げる)となつたのであらう。虎明本狂言では確かにアイサウ(「あひさう」)が見えるのである。アイサウは愛相であらう(この愛は通俗的語意)。通俗的な「愛」は、江戸期では、次第にアイソの意に限定され、江戸末期には一般に亡びるに至つてゐる(亡びたのは江戸の方が上方よりも早い)。幸田露伴「天うつ浪」(一・三八)の「エ、其の娘かエ、五十と云つてネ、容貌も悪かあ無いが、愛の無い、矢張りあ^{わたし}の妾の大嫌ひな海老茶の袋を穿^ぬいてる奴なのさ。」の「愛」はアイソの意にもとられさうであるが、愛情ぐらゐの意味である。

尚、「寵愛(する)」は室町期頃から民衆の用語となつたが、漢語の場合よりも愛B・愛Dの面が強く、通俗的な「愛」「愛する」の影響が著しい。「愛寵」は通俗化しなかつた。

さて、非通俗的な「愛」「愛す」は漢語「愛」に忠実な用語であるが、平安期以降次第に使用範囲が広まり、少くとも室町期以降は民衆の理解語彙に属するに至つたと考へられる。漢語「愛」は、上位→下位の傾向は強いものの、下位→上位などにも用ゐられるので、非通俗的な「愛」「愛す」にも同様の現象(通俗的な用語の場合も同様)が見られるが、宮地A(一六九・一七〇頁)が、下位→上位の「愛す」(「愛」も当然含まれる)の例は、儒教関係の漢文の訓読・解説の類に限られ、翻訳調の甚だしい作品に見えんとするのは、不精確である。宮地Aは貝原益軒の「女大学」には、下位→上位の「愛す」「愛」は見えないとするが、益軒「和俗童子訓」(一七一〇年成。女大学は後人による巻之五「教女子法」の改修と考へられる)には、「孝弟を行ふには、愛敬の心法をしるべし。愛とは、人をいつくしみ、いとをしみて、おろそかならざる也。敬とは、人をうやまひて、あなどらざる也。……各其位にしたがひて、愛敬すべし。……」(巻之二)、「孝子の深愛ある者は……」(同)に於るが如き例が見えてゐる。儒教的内容の表現に見られるが、翻訳調の甚だしい作品に於る例とは言へない。更に、石田梅巖「都鄙問答」(一七三九年刊)巻之一には次の如き例が見える。

カクノゴトク
如 是ナル時ハ父母ニ事^{ツカフマツルミチ}道ハ、愛^{アイ}ト敬^{ケイ}トノ二ツナリ。愛ハイツクシミアイスル心ナリ。敬ハツ、シミウヤマフ心ナリ。然ルニ汝ハ、父母ノ命ヲ用ヒズシテ心ヲ痛^{イタム}シム。心

ヲ痛シムルハ、愛心ナキガ故也。命ヲ不用ハ敬心ナキガ故ナリ。愛敬ノ心ナキハ鳥獸ニ同ジ。……

この書は石門心学の平易な啓蒙書であるが、子→父母の「愛」が語られ、「アイスル」の表現も見られる事に注意すべきである。勿論、江戸期の儒者の随筆等にも、下位→上位の「愛(す)」の例は多いが、新井白石「西洋紀聞」(一七一五年成)下巻「されどまた、其教とする所は、天主を以て、天を生じ、地を生じ、万物を生ずる所の大神大父とす。我に父ありて愛せず。我に君ありて敬せず。猶これを不孝不忠とす。いはんや、その大神大父につかふる事、其愛敬を尽さずといふ事なかるべしといふ。」の例は、天主教に関する珍しい例である。近松門左衛門「国性爺合戦」(一七一五年初演)第五に於る一官の詞に「ヤイ国性爺。うろたへたかおくれたか。……日本生れはあいにおぼれ義をしらぬと。……」とある「愛」(あい)は、子(国性爺)→父(一官)であるが、是も翻訳調の基だしい作品の例とは言へない。以上の例によっても、非通俗的な「愛(す)」(下位→上位の場合も含む)が民衆の理解語彙に属してゐた事が知られるはずである。尚、沙石集(第六)「父母ノ交会スル時、男子ハ母ニ愛ヲヲコシ、女子ハ父ニ愛ヲオコシテ……」には、男子→母の「愛」と女子→父の「愛」が見えるが、儒教思想に基くものではない。江戸後期にも下位→上位の「愛(す)」はかなり用ゐられたが、志築忠雄「曆象新書」(一七九八)の「然れども父を敬愛するものは、命あればなり」(上編下巻)、太田錦城「悟窓漫筆」(一八一三)の「今学者家に在りて、父母を愛し、兄弟を愛し、妻子を愛し、奴婢を愛す」(後編巻下)、玉虫諠「航米日録」(一八六〇)の「寔に希有の大賢なり、民人今に至り其徳を称し、之を愛する父母の如しと云ふ」(巻四)などにその例が見られる。

二・三 明治以後の用例

明治前期では、漢語「愛」に応ずる非通俗的な「愛」「愛す(る)」が用ゐられてをり、その流れは現代まで続いてゐるが、対等の人間として相手を思ひ、遇する(男女間の愛に於ても)意に用ゐられる傾向が著しくなつてゐるのは、キリスト教の影響など、西洋の影響が認められる。先掲の改修言泉・大日本国語辞典の愛の条が、男女の「愛」を love の訳語とするのは、必ずしも正確ではないが、一面の眞実を伝えてゐる。

宮地A(一七二～一七四頁)は、聖書のいはゆる委員会訳(明治七～一三)が「愛す」を用ゐるに至つたのは、漢訳聖書に強く影響されたものであるとするが、さ程影響されたとは考へられない。例へば、中村正直「敬天愛人説」(明治元年)に「……何謂愛人。曰。敬天。故愛人。……曰。敬愛。不_レ可_レ相離。天者。尊_二乎人_一也。故敬爲_レ主。而愛在_二其中_一。人者。与_レ我同等也。故愛爲_レ主。而敬在_二其中_一。」、福沢諭吉「文明論之概略」(一・三)(明治八年)に「神を愛し人を愛するの外」(この神はキリスト教の神)とある事からも、日本語に於る非通俗的な「愛す」の流れに沿つた用語である事が知られるはずである。宮地A(一七六～一七八頁)は、「花柳春話」(明治一年)の男女間に於る「愛す」は男(上位)→女(下位)に限られるとして、「余_レ始_メテ卿ヲ見ルヤ、卿ノ容貌少年ノ如クナラスンハ、焉クソ卿ヲ愛スル此ノ如ク深キニ至ランヤ。」(第一篇)の「愛ス」は、マルツラバースをアリスの保護者及び師と見立てた用語であるとするが、同書の「愛」「愛

(22) 「愛」「愛す」に就て

ス」は其程限定されたものではない。例へば、第三篇「世間ノ母親兒女必ス争フテ子ヲ愛敬セン」(子はマルツラバース)、第三篇「……マルツラバース彼レヲ愛セサルニ非ス」(「彼レ」は対等の関係にあるペンタドア)、第三篇「然レトモ平生談話ノ中、嬌態能ク人ヲ悩マン、人争フテ其愛ヲ受ケンコトヲ欲ス」(「其」はフロレンス)、第四篇「兒夫レ彼ヲ愛スルヤ否ヤ……見彼ヲ愛スルコト父母ニ垂ゲリ」(「兒」は少女カメロン、「彼」は壮年ラムリ)の例を参照すべきであつて、宮地A引用の「愛ス」は必ずしも上位→下位ではなく、「愛恋ス」「愛慕ス」ほどの強い表現ではないといふだけである。尚、宮地A(一七八・一七九頁)は「ラ(ア)ブする」「リーベンする」に就ても述べてゐるが、此等は元來学生語であり、隠語的である(男女の愛に限られる)事を指摘してゐない。

「愛」「愛す(る)」は、明治以來、口頭語に於る使用度も次第に益して來てをり、現代流行歌に於る最高頻度の用語は「愛」であると言はれる程にもなつてゐるが、非通俗的用語であり、文語的であるといふ性格を脱し得たわけではない。一般的には、年輩者ほど照れくささを感じる用語と言つてもよい。語感に個人差・年齢差が大きく、例へば「親を愛する」と言へるか否かに関して——國木田独歩「運命論者(六)」(明治三五年)に「僕には母を母として愛さなければならん筈です」なる例もある——、意見が分れる事にもなるのである。先掲の諸辞書には「愛する」を「かはいがる」(江戸期以來、「可愛がる」(カアイガル・カワイガル)なる表記が多い事に注意)と解するものが多かつたが、「愛する」=「かはいがる」と思ふ者が「親を愛する」を否定するのは当然であり、上位→下位の関係及び同等関係の「愛する」のみを認める者が「親を愛する」を認めないのも自然である。「愛」を用ゐる熟語は少くないが、多くの人にとつて「愛情」「愛着」などは「愛」よりも自然な用語である。この外述すべき事は多いが、この頃「愛する」を性的愛撫^{注6}等の意で用ゐる事があるのは英語 love 等の影響が強い事を附言するに止めておく。

二・四 まとめ

- (1)「愛(す)」は、古くは特に上位→下位の傾向が著しかつたが、下位→上位の例も無視出来ない。
- (2)「愛(す)」には、漢語「愛」に應ずる非通俗的な其と、日本語独特の通俗的な其とがある。
- (3)通俗的な「愛(す)」(専ら行動、殊に肉体的表現に關係)は院政期頃に生じて、江戸末期に亡びた。
- (4)現代の「愛(す)」は非通俗的な「愛(す)」の流れに沿ふものであるが、対等の人間として相手を思ひ、遇する意に用ゐられる傾向が著しくなつてゐるのは、西洋の影響が認められる。

注1 愛の正字は愛で、説文に行兪也とされる字であるが、恠に代用するのが例となつてゐる。藤堂明保「漢字語源辞典」が、恠と哀を同一の感動詞に由来するとするのは、妥当と思はれる。

注2 アハレム・カナシもこの種の語に属する。アハレムは感動詞アハレに由来し(注1

参照), カナシは動詞カスに由来する(拙著「日本語の溯源的研究」二九九頁). 仏語の慈悲の悲の原語 *karuṇā* (サンスクリット及びパーリ語)は, 呻き・嘆きの意から, あはれみの意になつた語である.

- 注3 改修言泉が太祇の句の「愛し」を「大切に思ふ. 大事にす」と解するのは不精確であつて, 肉体的表現の意に解すべきである.
- 注4 問題の語は, 仏語の愛敬之相の愛敬に当るとする説が妥当と考へられる. 従つて, 原形はアイキヤウであらう. アイキヤウ>アイギヤウに就ては問題もあるが, ズイシン>ズイジン(隨身)の如き類例がないわけではない. 中世以降, 二形が並行したが, 近世にはアイキヤウが普通の形となつた. 日葡辞書では, <イツクシミ, ウヤマウ. *Reuerenciar com amor interiormente.*>及び<イツクシミ, ウヤウヤシウス. *Mostrar amor, & agasalhado, & reuerencia no exterior.*>と解する二種の *Aiquiō* が見え) 補遺に *Aiguiō* が見える), 第二の其は *Aiquiō* (愛恭)の誤ではないかとする説もあるが, 愛恭なる熟語の例は古来なく(同辞書に恭を用ゐる熟語の例もない), 此も愛敬と解すべきである. 此はアイギヤウに應ずる形であるが, 愛敬なる表現にそつた解釈がなされたものと思はれる(羅葡日辞書にはアイキヤウ・アイギヤウは見えない).
- 注5 アイ附クルは相附クルであつて, 日葡辞書に<*Atrahir asi, domesticar*>と解されてゐる語である(*domesticar* は, 馴れさせる, 手なづける, などに当る). 日本国語大辞典は, アイック(愛付)なる語を「かわいがる. 目をかける」と解して, 談義本の例を挙げるが, 此は実は「相附く」なのである. 「愛」とアヒ<合・相>の混同の例としては, ヒトアヒ<人合>が「人愛」と書かれ(「他愛」とも), 更にニンアイ・ジンアイとも言はれるに至つた例もある——樋口一葉「にごりえ」(六)の「人愛」は擬古的な例——. 「春色恵の花」(初編卷之二)などでは「人愛」を「せじ」と読ませてる. 尚, 「情合」も情愛と間違はれさうな語である.
- 注6 洋語等に関しても述べる予定であつたが, 紙幅の都合で割愛する. 没我的な愛を原義とする語はいかなる言語にもない事を明かにするのが, 小論執筆の動機の一つであつたが, 触れる事が出来なかつた——例へば, ギリシャ語 *agapē* なども元來は没我的なものではない——. *caress* 等に就ても述べるべきであるが省略する. 尚, 鼓常良「新訂ドイツ文学史」七一頁に「西洋には『愛』といふ言葉があつて『恋』即ち男女間の愛にのみ用ひる語がないが, この騎士文学にはそれがある. 即ちミネ (*Minne*) である。」とあるが, *Minne* にさういふ限定はない.

〔六月二七日に一部を改めた. 主に編集委員会の指摘による〕